

# 柿 生 文 化

柿生郷土史料館 情報・研究誌  
 住所: 川崎市麻生区上麻生 6-40-1  
 柿生中学校内  
 電話: 044-988-0004(柿生中学校)  
<http://www.kakio-kyodo.com>  
 第74号

## 川崎大師の「赤札」の不思議

「赤札」はなぜ“赤”なのか？ なぜ「赤札」に南無阿弥陀仏なのか？

今年川崎大師で、10年に一度行われる弘法大師像の御開帳が5月1日から31日までの1ヶ月間行われ、弘法大師直筆と伝わる「赤札(あかふだ)」が老若男女に配られました。

川崎大師＝平間寺は平安時代、信仰心の篤い武士の平間兼乗(ひらまかねのり)が夢の中でお告げを受け、海底より弘法大師の像を引き上げ、これを祀って寺を開いたのが始まりでした。

さて、「赤札」の“赤”の意味は何なのでしょう。護り札や宝印(寺社で頒布するお守り札に描かれた宝珠の形をした印)などは朱色が使われていることが多いようです。昔、日本で天然痘(痘瘡＝ほうそう)が流行した時代は、赤色で刷られた護符から衣類・布団・玩具・食物を始め病人の周りを赤色で埋めつくしたそうです。このことは赤色の持つ魔力のようなものを強く感じます。魏志倭人伝には3世紀頃の日本人の姿として身体に朱色を塗っていたと記述され、魔除けにしていたことが考えられます。また古墳時代の祭祀遺跡からは、神事に使用されたと考えられる朱塗りの土器がよく発見されています。東柿生小学校の敷地からも同様の土器(はじき＝弥生時代から平安時代にかけて作られた素焼きの土器)が発見されています。一方、全国的にいくつかの神社では赤米を栽培して神事に用いているところがあるようです。仏教典には「阿弥陀如来の身体は“紅顔梨色(くはりしき＝赤い水晶のような色で光を放つ)”で世界を照らす」と書かれ、赤色が強調されています。上麻生の浄慶寺境内にある秋葉神社でも秋葉講の日には赤色の文字を刷ったお札を講中の方々に配布しています。どうも“赤”は古代から一種の魔力があり、その色は神事にも使用されていたようです。川崎大師の赤札も同じ意味を持っているようで、ご利益を信じて朱書きの南無阿弥陀仏のお札を6文字ごとに切り、食べる方もたくさんいらっしゃるそうです。

さて、もう一つの疑問はお札に書かれている「南無阿弥陀仏」という文字です。川崎大師は弘法大師(空海)が始めた真言宗ですから信仰の中心となる仏様は「大日如来」です。したがって「南無



川崎大師の  
赤札: 白地に  
赤の6文字

大師遍照金剛(私は弘法大師が信仰する大日如来にすぎります、という意味。※「南無」＝帰依・すがる、「大師」＝弘法大師、「遍照金剛」＝大日如来の教えが広く世界を照らす)と一般的には唱えるわけですが、赤札に書かれている言葉は一般的に浄土宗などで唱える「南無阿弥陀仏(私は阿弥陀如来にすぎります、という意味)です。真言宗の寺院が「南無阿弥陀仏」というのは少しおかしいのではないかという疑問を持ってしまいました。そこで、ほかにも「真言宗」と「南無阿弥陀仏」が関連する事例があるのか調べてみました。

京都山科(やましな)の真言宗の泰山寺では「南無阿弥陀仏」と書いた短冊千枚を供え物に添えて川に流し、塩をまく先祖供養が行われていました。これと同じケースは他の地域でもいくつも見られました。また四国八十八ヶ所第二番札所の真言宗無量寿院極楽寺では『極楽の阿弥陀の浄土へ行きたくば、南無阿弥陀仏を口癖にせよ』という御詠歌(仏の徳を讃えた歌)が唄われています。また、寺院でよく見られる、如



川崎大師平間寺本堂

来(悟りを開いた人、仏)や菩薩(悟りを求めて修行する人)や神々を描いた「曼荼羅(まんだら)」という絵には大日如来の脇に阿弥陀如来や釈迦如来を見ることができます。調べてみますとこれと同じような事例を結構たくさん発見することができました。良くわからないことが多いので、直接川崎大師に電話でお聞きしたところ、『宇宙にはたくさんの如来や菩薩がいっぱいいますが、それぞれは皆、大日如来につながります。阿弥陀如来、薬師如来でも地蔵菩薩、観音菩薩などの教えは皆、大日如来の教えと同じです。だから大日如来を信仰する真言宗が南無阿弥陀仏を唱えても不思議なことはありません』というお話でした。いろいろ調べてみますと、如来も菩薩もそれぞれが役割を持っているようです。例えば薬師如来は人々の病苦を救い、阿弥陀如来は人々の極楽往生の案内を、地蔵菩薩は子供を守り無限の慈悲で人々を救う、など。そして、それらの大本となる存在が大日如来であるということなのでしょう。

(文:板倉)

シリーズ

「麻生の歴史を探る」 第44話

# 麻生の古道(5) 伝承鎌倉道～片平

小島 一也 (柿生郷土史料館相談役)

元弘3年(1333)、新田義貞の鎌倉攻めは片平にあった台光寺という寺を焼いた、との伝承があります。一方、現修廣寺の前身と言われる台光寺が小字寺台にあったとされ、そこには鎌倉時代創建とされる熊野権現社の跡地もあり、そしてその昔、鎌倉道があったと言い伝えられています。

この片平の地はその名のごとく片平川をはさんで二つの大地に分かれますが、北側に急坂が多いのに対し、南側は穏やかな傾斜の平地が多く、そこにある道は、南側には隣接する栗木、真光寺、能ヶ谷境の尾根道と、北側には片平川北岸に沿う道、そして南側の尾根道から片平川流域を超え、北側に向かう幾筋かの官道がありました。

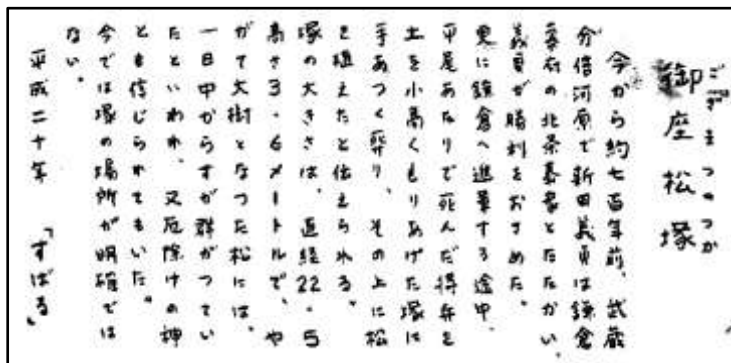
寺台からの道は麻生川右岸の山裾をぬって片平葉積台、古沢、万福寺に向かいますが、葉積台には夏刈谷と称するところがあり、源頼朝が狩猟したところと伝承されます。その伝承をもとに、修廣寺の前身である台光寺(柿生小学校の南後方にあり、夏菟の地名があった場所)の山号として“夏菟山”が名付けられ、修廣寺に引き継がれたものと考えられます。続く古沢の地は源頼義(前九年の役)に仕えた古沢氏の在所で、熊野権現社の跡地もあり、また、鎮守九郎明神社は源義経を祀ったとされ、さらに前述した後白河法皇の笹子姫はこの地に落ち延びたと伝承されており(第67号第37話参照)、この道筋は鎌倉以来の古道であったのでしょう。



燈籠の松

片平のほぼ中央、京保台(享保台)、そして原台には町田広袴境の富士塚(海拔98.64m)の尾根を経て片平川を越え、現柿生学園(片平分校)から五力田、平尾、金程に向かう坂道がありました。この道を道庄坂と呼び、五力田との尾根境を相の坂と称し、そこには善明寺(廃寺)があり、今は全く形状を変えましたが、小高い丘(87.36m)には、“燈籠の松”と呼ばれる老松がありました。「形状いかにも風致に富む、昔の鎌倉街道にあたり、この松に燈籠を掲げしと伝えり・・・」(柿生岡上郷土史)と記し、鎌倉道があったことを伝えています。

片平・栗木堺の尾根道で、広袴・真光寺から超える道を“亀井坂”と呼びますが、これは亀井六郎に関する伝承によるもので、この道は平尾から稲城坂浜方面に向かっており、栗木・平尾堺の峰(標高約120m)に大きく枝を広げた“御座の松”と呼ぶ大松があったそうです(明治6年枯死)。地元古老の話では、ここは分倍河原に通じる鎌倉道で、元弘3年新田義貞の鎌倉攻めの際、敗れた鎌倉方の兵士を葬った塚で、供養のため松が植えられ、地元では“厄除け松”とも呼んだそうで、現平尾団地(13号棟)と栗木の境には“御座松塚跡”と記した二世の松が植えられています。



御座松塚案内板



御座松塚跡



片平越えの古道

一方、五力田から金程に向かった道筋は向原から現千代ヶ丘を経て、鎌倉道の頂と伝承される“七国峠”に達します。ここは標高136m、七つの国(武蔵・相模・伊豆・駿河・甲斐・上総・常陸)が望めたからその名がついたといわれ、義貞軍もこの地に陣を敷いたことでしょう。

この地は約200年後の享禄3年(1530)、上杉・北条の戦いで菅の小沢城を陥した上杉朝興軍は小沢原(現金程一丁目)に布陣し、これを迎え撃つのは北条早雲の孫、若年16歳の氏康で、上杉軍を破り、勝った勝ったの勝鬨を上げたところが、金程から細山に通じる勝坂とされ、その折の戦いの伝承が矢崎・陣川・膳部谷戸・隠れ谷戸などの名がありますので、そこには軍道が通じていたのでしょう。

参考資料:「川崎市史」「川崎地名辞典」「歩け歩こう麻生の里」「詳細首都圏地図(昭文社)」



## シリーズ 黒船来航

## 開国秘話 (10)

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

## ◆米国側の交渉作戦◆

プレゼント作戦の成功で、交渉が動き始めると、ペリーは最後の一手を繰り出しました。旗艦のポータハン号に、幕府側代表を招いての答礼宴を開いたのです。3月27日のことでした。

そうはいつでも、ポータハン号の司令長官室での正餐は、27名が限界でしたから、甲板にもいくつものテーブルが用意されました。シャンパン、マデイラワイン、シェリー酒、パンチ、ウイスキーなどの酒類も沢山出されました。「日本国皇帝のために」、「アメリカ大統領のために」、「日本の淑女たちのために」……と、次々に乾杯の音があがります。この時ペリーは、「条約が締結できるかどうかは、この招宴での歓待の成果にかかっている」と、乗組員一同に檄を飛ばしていたのです。米国側は、何とか座を盛り上げようと必死だったのです。

座は大いに盛り上がりました。バンド演奏にダンスも始まります。日本側も富士山の絵柄の扇子などを贈り、中にはちゃっかりと懐中時計をせしめる者もありました。役人には漢詩を好む者も多く、自分の扇子を羅森に示して、漢詩を書いてもらう者も大勢おりました。

ペリー一行の努力が実り、3月27日の招宴は成功しました。酒の入った艦上の宴会で、双方の歩み寄りが図られ、懸案だった問題が一举に解決をみたのです。米国船の海難事故の避難港として、函館(当時は箱館)と下田を開港する件も、この時に決着しました。

## ◆日米和親条約の締結◆

翌28日、詰めの交渉にペリー一行が再び横浜村に上陸した際に、応接掛が決定事項としてペリー側に手渡した書簡に、函館の外に下田も開港する、その時期は来年3月とする旨が、記されていました。

この日本側の決定は、幕府側が当初描いた方針に沿ったものでした。函館、下田の2港以外は開港しない。これが日本側の方針でした。応接掛は、下田の開港を渋ることによって、日本側の方針を守ること成功し、同時にその他の日本側の要求を、米側に飲ませることも成功したのです。見事な交渉術でした。

ところで、この開港は通商のためではありませんから、2港が自由貿易港になったことを示すものではありません。米国人漂流民や、物資欠乏の米国船が入港できる、避難港としての開港でした。

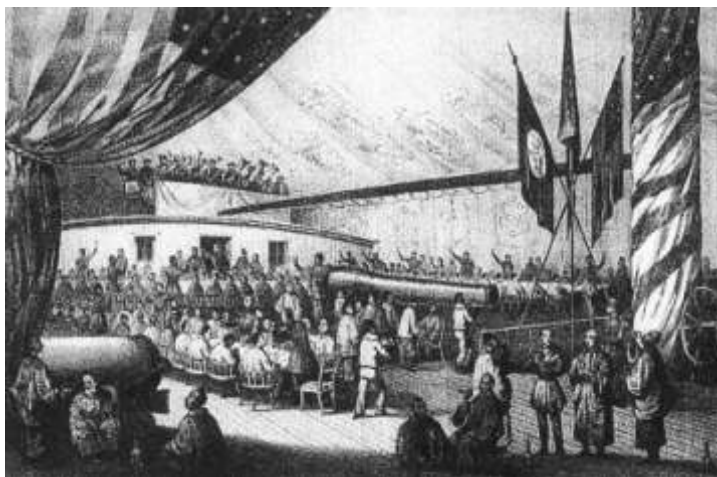
さて、3月31日に調印、交換された日米和親条約は、全12条から成っているのですが、主な内容は次の5項です。

- 1、下田・函館の2港を開く(第2条)
- 2、海難事故の救助経費は、双方が負担する第3条)
- 3、漂流民と渡米人民の人道的な扱い(第4条)
- 4、アメリカ人は、日本の「正当な法度に従う」(第4条)
- 5、18ヶ月経過後に、アメリカの領事または代理人の駐在を許可する(第11条)

このうち、1項、3項、5項は米側の主張を日本側が認めたものですが、2項と4項は、日本側が強く主張し、米国側が譲歩したものです。

2項は、米国船の海難事故と日本漂着を想定して、米国側が作成した条文を、日本船が米国海岸に漂着することもありうるとして、条約の双務性に幕府が拘って修正したものです。4項もまた、日本側の強い主張に、米国側が折れて加えられたものでした。幕府は最後まで、条約の双務性に拘ったのです。

条約交渉の席で、日本側は強気を貫き通しました。交渉がまとまった段階で、ペリーは、ピアーズ大統領に書簡を送り、日本側に譲歩したことへの理解を求めました。手紙には、「こうした譲歩は、交渉過程では避けられない事であり、いずれも人道主義に基づくものなので、政府がこれを了とすることを期待する」と、記されていました。(続)



ポータハン号甲板での米側の答礼宴 『ペリー艦隊日本遠征記』より



横浜応接所に入るペリー一行(3月28日)『ペリー艦隊日本遠征記』

# 柿生郷土史料館開館日のご案内

◎開館日：奇数月は毎日曜日、偶数月は毎土曜日

**7月** 6・13・20・27日(毎日曜日)

**8月** 2・9・16・23日(毎土曜日)

◎開館時間：午前10時～午後3時

# 柿生郷土史料館7月以降の催物ご案内 (入場無料)

## 第7回 実物のミニ歴史資料展

## 明治6年 太陽曆に替わった日

展示品：「明治5年 太陰曆」「明治6年 太陽曆」  
「江戸期 伊勢曆」「改曆辨(福沢諭吉著)」  
他

期間：4月26日(土)～9月14日(日)

(開館日：7、9月⇒日曜日；8月⇒8/31除く土曜日)

内容：明治5年12月3日を明治6年1月1日とした太陽曆への改曆の意味を考えます。



明治5年の太陰曆(左)と同6年の太陽曆案内書「改曆辨」

## 第47回 カルチャーセミナー

### 欧米人も驚いた和式測量技術 (仮題)

～日本全図作成の伊能忠敬の驚きの測量技術を解き明かす～

講師：君川静夫氏 (立正大学講師)

日時：7月27日(日) 13時30分～15時30分

会場：柿生郷土史料館特別展示室

内容：・日本古来の測量技術を解明する  
・伊能忠敬の業績とその足跡を辿る



伊能忠敬

## 夏休みジュニアカルチャーセミナー

### 郷土の歴史探検 ～中世の柿生と亀井城跡～

まだ少し  
余裕が  
あります！

日時：8月7日(木) 13:00～16:30

対象：小学生(4年生以上)～中学生(小学生は保護者同伴でも可)

定員：30名 (申し込み多数の場合は抽選)

締切：7月17日(消印有効) ➡ まだ少し余裕がありますので、追加募集しています

集合：柿生郷土史料館 13:00 (始めに館内で見学地の説明をします)

申込方法：往復はがきに「郷土の歴史探検申込」と記入の上、学校名・学年・住所・氏名・電話番号・  
同伴される場合は同伴者名を明記して下記宛お送りください。

**宛先** 〒215-0021 川崎市麻生区上麻生6-40-1 柿生中学校内 柿生郷土史料館

参加費：100円(保険代として当日徴収しますので、同伴の方からも頂きます)

その他：軽いハイキングスタイルでご参加ください(水筒、帽子、タオル、はき慣れた靴など)

お問合せ：090-4431-9778 板倉支援委員

## 第48回 カルチャーセミナー

### アフリカ スーダン共和国の今日を知る

◆今年7月に帰国する若林氏の最新のスーダン情報を聞く

◆混迷のアフリカ諸国の実態

講師：若林恵子氏 (スーダンの平和を守る会現地地責任者)

日時：9月21日(日) 13時30分～15時30分

会場：柿生郷土史料館特別展示室

内容：世界情勢の中のアフリカ諸国の課題を考える